

雑録

「教員のための博物館の日」 —博物館ネットワークセンターの取り組みと今後の展開—

*¹後藤 鮎子

*¹熊本県博物館ネットワークセンター

キーワード：教員のための博物館の日，博学連携，学習資源

1. はじめに

国立科学博物館が提唱している「教員のための博物館の日」（以下、「博物館の日」）は、教員が博物館に親しみを持ち、博物館理解を促すことを目的として2008年に国立科学博物館で始まり⁽¹⁾、全国に広がりを見せている。2024年度に全国63カ所で実施されていることから⁽²⁾、学校教育の場で博物館利用を促進させたいと考えている博物館等施設（以下、博物館）が多いことがわかる。熊本県博物館ネットワークセンター（以下、センター）は主旨に賛同し、2018年度より年に1回熊本県内で「博物館の日」を開催している。⁽³⁾

本稿では、センターのこれまでの「博物館の日」の取り組みについて振り返り、県内博物館と学校の連携を深める事業となり得るための今後の展開について検討したい。

2. 企画・運営

2.1. 本事業の内容

センターが実施する「博物館の日」は教員に博物館に親しみを持ってもらい、それらの学習資源を有効に活用してもらうことを目的にしている。実施日は、教員が参加しやすい長期休業中、特に夏季休業中に設定している。センター主催の開催初年度はセンターを会場として実施したが、基本的に県北、県央、県南の博物館が持ち回りで会場館となるようにし

ており、その会場館とセンターが主催となって実施する形式をとっている。

開催年度	開催地域	会場館
2018年度	県央	熊本県博物館ネットワークセンター
2019年度	県南	八代市立博物館未来の森ミュージアム
2020年度	新型コロナウイルス感染症拡大予防のため中止	
2021年度	新型コロナウイルス感染症拡大予防のため講演会のみオンライン実施	
2022年度	県北	熊本県立装飾古墳館
2023年度	県央	御船町恐竜博物館
2024年度	県南	熊本県環境センター、水保市立水保病資料館

図1 会場館一覧

これは、センターが県内の博物館との連携体制の構築や活動の支援等、ネットワーク機能を重視しているためである。1カ所に限定することなく、様々な博物館を会場館とすることで、各施設にある学習資源を多くの教員に知ってもらえる機会が増えることに繋がる。事業のプログラムは、博学連携に関する講演会、会場館の見学、3部制のワークショップ、センター作成の学校用移動展示パッケージ⁽⁴⁾の展示で構成してきた。

時間	プログラム		
9:30~10:00	受付（熊本県環境センター）		
10:00~10:05	開会行事		
10:05~11:35	講演「里山の小さな博物館における博学連携の実践：博物館と学校が共創する多様な学び」 講師 十日町市立里山科学館 越後松之山「森の学校」キョロロ 学芸員 小林 誠 氏		
11:35~12:20	展示のポイント解説及び自由見学（自由見学は水保市立水保病資料館）		
第1部 13:20~14:10	ワークショップA 本物の化石に触れて、股骨の コブをつかんじゃおう！	ワークショップB シルクスクリーンで水保エコ バッグづくり	ワークショップC はじめての清和文楽
	御船町恐竜博物館	水保病歴史資料館	清和文楽館
第2部 14:20~15:10	ワークショップD ワークシート「研究シート」 を使った研究者体験	ワークショップE ようこそ リアル、ライト岡 安史記念館へ	ワークショップF 歴史公園博物館の紹介
	天草市立御所浦恐竜の島博物館	リアル、ライト岡安史記念館	歴史公園博物館・源成館生館
第3部 15:20~16:10	ワークショップG 知識や想像いらずにできる鑑 賞教育—アートカードとワー クシートの活用—	ワークショップH 「くまはくデジタルコンテンツ」 のご紹介 Part.3—製作・体験、 やってみよう！—	ワークショップI 創作キットで俳句をつくろう
	熊本県立美術館（本館）	熊本博物館	くまもと文学・歴史館
16:10~16:20	各ワークショップにて閉会		

図2 「博物館の日」プログラム構成の例
(2024年度チラシより)

2024年11月14日受付 2025年2月27日受理

*¹熊本県宇城市松橋町豊福1695

講演会は、博物館と学校の連携について具

体的な実践例を聞きたいという声が毎年挙がるため、学校現場と博物館の両方で勤務経験のある講師や、学校との連携事業を積極的に実践している講師を選定している。見学会は、会場館担当者による展示やバックヤードの解説、もしくは、展示のポイント解説後に参加者に自由見学をしてもらうという形式である。ワークショップでは、県内の博物館に参加を募り、9施設を選定して実施している。9施設のワークショップを3部制で実施し、参加者は3つのワークショップを選択して体験する。

このように、毎年会場を変えながら、外部講師による講演会や県内の博物館によるワークショップを一日で体験できるという形式は、全国各地で開催されている「博物館の日」でも見られない。(5)センターがこれまでに構築してきた県内博物館とのネットワーク機能を発揮できている一つの例と言える。

2.2 企画・運営上の工夫

センターが「博物館の日」を実施する上でまず重視していることが、参加者である教員と県内の博物館を繋ぐことである。ワークショップを3部制にして、9館の博物館に参加してもらうのも、参加者である教員と県内の博物館との繋がりをできるだけ多くつくるための工夫である。さらに、ワークショップ館だけでなく、県内の様々な博物館が実施している体験活動や団体利用について事前に調査した結果をまとめた冊子「熊本県内博物館・資料館等団体利用情報」を参加者に配布している。(6)センターは、県内の博物館が持つ学習資源や実施している学校との連携活動について教員に少しでも多く知ってもらい、教育活動への活用のきっかけづくりをする役割を担っていると考えている。

次に重視しているのが、様々な校種、教科の教員に参加してもらうことである。そのため、広報の際に、県内の小学校、中学校、高等学校、特別支援学校、義務教育学校のすべて

の教職員にチラシを配布している。

2021年度から2024年度にかけての参加者のうちアンケート回答者の約89%が配布されたチラシをきっかけに参加申込を行っているため、チラシ配布の効果は高い。(7)

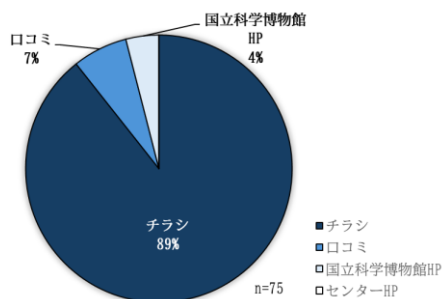


図3 参加の契機となったもの (2021年度から2024年度アンケート(2020年度を除く)回答より)

さらに、開催地域の校長会に参加して広報を行う機会をつくったり、講演会やワークショップに関係する教科の研究部会の事務局担当者に連絡をとり、会員に対して開催メールを送ったりして、積極的に広報活動をしている。また、ワークショップでは幅広い分野の体験を可能にするため、分野に偏りが無いようワークショップ館を選定し、自然系と人文系のプログラムをバランスよく配置することで、様々な教科の教員が参加しやすいようにしている。毎年実施している参加者への事後アンケートでは、ワークショップの実施方法について、「同時におこなわれるものの、ジャンルが重なっていないことがよかった」など、肯定的な意見が多い。

3. アンケート結果

「博物館の日」では参加者に対して毎回アンケートを実施している。主な質問項目に対する結果とその分析を簡単に行う。

3.1. 参加者数の推移

参加申込数は会場となる地域によって毎年変動があり、特に、県央で開催した年に参加者が多い傾向がみられる。

これは、交通アクセスの良さとともに、県

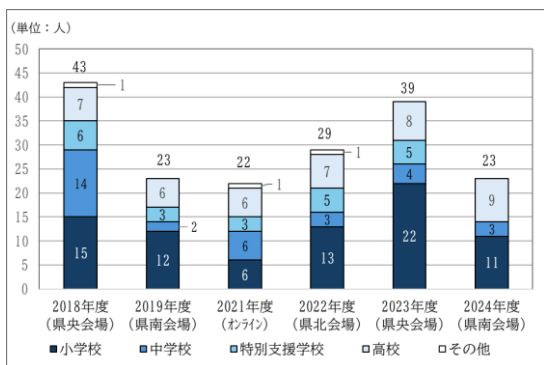


図4 教職員参加申込数推移(2020年度を除く)

央の教員数が多いためであろう。全体的には、年度を重ねるごとに参加者数が増加傾向とは言い難く、センターが設定している定員(年度によって異なるが、40名から45名程度)を上回る程度の申込数になる仕掛けが必要であろう。例えば、「博物館の日」を教員研修として位置づけ、Plant 全国教員研修プラットフォームに受講履歴として記録できるようにし、教員にも受講履歴として記録できる研修であることを周知することが挙げられる。(8)センターにおいては、2024年度の「博物館の日」実施前に熊本県の教員研修担当者に確認を行い、センターが実施する「博物館の日」がPlantに記録し得る内容であるという回答であった。(9)県担当者への確認が時期的に遅く、参加募集期間終了間際の周知となったため数名の参加者増にしか繋がらなかったが、Plantに受講履歴を記録できるという点に反応を示した教員は少なくなかった。来年度以降は、チラシ配布とともに研修受講履歴記録についてもアピールを行う必要がある。

参加申込数の推移のうち校種別を見ると、高校教員の参加申込数が微増傾向である。これについては、筆者は、高等学校の学習指導要領の改訂により、探究を意識した授業や課題研究をする教員が多くなっていることが要因の一つではないかと考える。現行の学習指導要領では、「探究」がキーワードの一つとなっており、授業において探究のノウハウや専門性が求められる場面が多くなっている。今年度の参加者の事後アンケートで、高校教員

から「博学連携の実践から、本校でも探究活動に取り入れられそうなヒントが得られた」「博学連携のあり方は探究に使いたいと思う」という感想が得られた。このことから、探究に活用できる学習資源にアンテナをはっている高校教員の参加に繋がったのではないかと考える。

3. 2. 参加者の評価

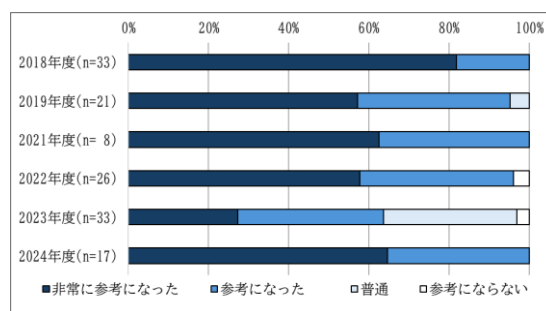


図5 講演内容についての評価 (2018年度から2024年度アンケート(2020年度を除く)回答より)

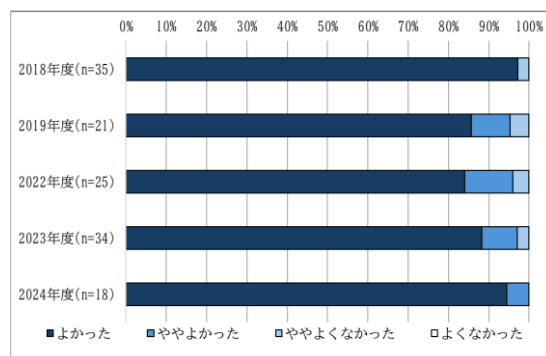


図6 ワークショップについての評価 (2018年度から2024年度アンケート(2020年度を除く)回答より)

参加者のほとんどが「博物館の日」の講演会やワークショップについて高評価である。特に、ワークショップについては毎回好評で、「どれも面白い内容だった」「興味が深まった」などの声が挙がり、センターが実施する「博物館の日」の目的の一つである博物館に親しみを持ってもらう点についてはある程度達成していると考えられる。また、「授業に活かしたい」という感想が多数見られ、博物館が持つ学習資源を活用する意欲を高められたのではないだろうか。

「博物館の日」に参加して、博物館を教育活動の中で活用できると思うか」という質問については、どの校種の参加者も9割以上が肯定的な回答をしている。

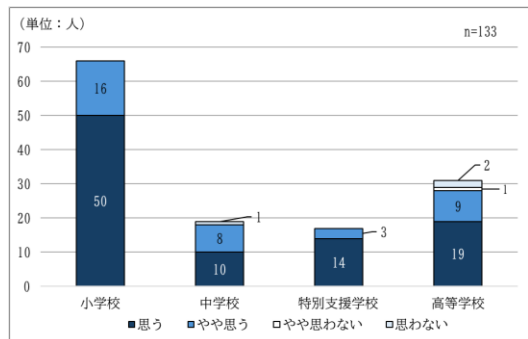


図7 博物館の教育課程での活用の可能性 (2018年度から2024年度アンケート(2020年度を除く)回答より一部抜粋)(10)

【小学校教職員】
 ・体験活動の中で専門家に説明いただける機会を子どもたちに提供できるため
 ・年度当初に計画的に実施すれば、十分活用できると思う
 ・地域と一緒に学ぶことができるツールの一つとして活用できそう
 ・実物や学芸員の先生からの話で、子どもたちがいきいきと学習に臨めると思う。
 ・小学校では、歴史、理科、総合的な学習の時間で特に活用できると思うから
 ・社会科見学や出前授業で活用できる ・子どもたちも夢中で取り組みそう

【中学校教職員】
 ・素材が博物館等には色々あるので、教材化を図っていく価値はあると思う
 ・体験的な学習は、とても教育的効果が高いと思う
 ・最近では出前講座やオンラインでの講座が可能だから
 ・生徒が楽しく学べるから ・出前講座があるから

【特別支援学校教職員】
 ・イメージと違ってかたくなく、体験型なので楽しく活動ができるから
 ・子供たちの学びを深めるため、また、教師である私自身も専門家である博物館の方と連携することで新たな学び、学校の教材開発も進んでいると感じた。
 ・生徒たちの興味関心をひく面白い教材が必要だから

【高等学校教職員】
 ・実際に経験する(触れる、観察する、聴くなど)ことでしか理解できないものがあり、それによって子どもたちがさらに知りたがり、と思うようになるから
 ・資源としての教材が博物館に沢山ある ・欲しいシーンがすでにある
 ・本物を見ることが大切だから ・教科を越えた横断的な学びにも繋がる

図8 博物館を教育活動の中で活用できると思う理由 (参加教員への2018年度から2024年度アンケート(2020年度を除く)回答より一部抜粋)

図7, 8より、参加者が博物館の資料やプログラムを学習資源として活用できると考えているのは確かであり、博物館に教育的効果を期待していることもアンケート結果に表れている。また、博物館が実施している既存のプログラムだけでなく、新たな教材開発を求め声が挙がっており、中長期的な教育効果を期待している教職員もいる。さらに、教科横

断的な学びへの効果を期待している教職員も見られ、教職員が博物館に求める教育的効果も多様化している。

3.3. 参加者と博物館が抱える課題

博物館への教育的効果を期待している参加者は多いものの、実際県内において、学校が博物館を見学旅行や団体利用以外で積極的に活用しているという事例はあまり耳にしない。

そこで、2024年度の参加者アンケートにおいて、博物館との連携に対してどのような点に難しさを感じているのかを尋ねるとともに、「博物館の日」にワークショップ館として参加した博物館の担当者にもアンケートをとった。

【小学校教員】
 ・博物館のことを知らなすぎで、どのような場面で連携できるのかが分からない
 ・博物館によっては受け入れ人数の制限がある
 ・授業(単元)のどこで活用できるかや、時数確保などの検討
 ・学校の立地条件 ・交通手段とそこにかかる費用。

【中学校教員】
 ・活用の意義や有用性については十分理解できているが、多忙な日常業務に忙殺されてしまい余裕がない ・事前準備が大変そう
 ・連続した時間割の時にしかできない ・交通費がかかる

【高等学校教員】
 ・時間の確保、移動手段、単発で終わってしまうがちな点など
 ・生徒が博物館の内容に興味をもつか不安がある
 ・時間設定や費用 ・授業時数が足りない ・近くに博物館がない

図9 学校教育と博物館との連携で難しさを感じる点 (教員の回答)(参加教員への2018年度から2024年度アンケート(2020年度を除く)回答より一部抜粋)

・学年など段階に応じた対応が十分でない事がある
 ・日程調整、事前打合せ、当日の対応 ・遠方からの利用が少ない
 ・プログラム開発・更新等、人も時間も予算も足りない
 ・博物館から教員への情報周知に課題あり
 ・博物館への見学やレファレンス対応などの要望は、授業の進度や先生の都合により、急に来ることが多く、すぐには対応できないことが多い
 ・授業での利用・見学も偶発的かつ単発での利用がほとんど
 ・学校現場の声を把握して対応につなげることが課題
 ・学習指導要領を博物館的に研究する場がない
 ・バスを保有している博物館は連携数が多いが、バスを保有できる程の予算がない
 ・博物館と連携して授業を行う/丸投げする教員など、人による差が大きい

図10 学校教育と博物館との連携で難しさを感じる点 (参加博物館職員の回答)(2024年度参加博物館職員へのアンケート回答より一部抜粋)

学校と博物館との連携の中で、共通の課題として時間確保、費用、立地条件による交通手段、単発的な取り組みに終わる等が挙げら

れる。筆者も教員の経験があるため、限られた授業時数の中での時間捻出、また、交通費や体験活動があるのであればその際の保険料の問題が連携の障壁となるのは想像に難くない。これに関しては、教職員が年度当初に年間計画を立てる際にあらかじめ時間を確保しておくこと、予算立てをしておくことが必要である。そのためにも、博物館がどのような単元でどう活用できるのか具体的な活用方法を示すこと、さらには必要経費を明示しておくことが重要である。

また、注目したいのは、「活用の場面がわからない」という教員の意見や、「学習指導要領を博物館的に研究する場がない」という博物館職員の意見である。教員と博物館職員が学習指導要領を元に、博物館をどのような場面でどう活用していくことが望ましいのかを共に学ぶ場が求められている。

学校における県内の博物館利用を促進させるためにも、情報共有や意見交換の場を設けることで課題解決の糸口を見出せる可能性があると考え、アンケートにおいて、「教員と博物館職員が意見交換する機会を設定した場合、どのような意見交換をしたいか、もしくは、どのようなことを尋ねたいか」質問した。

教員	博物館職員
<ul style="list-style-type: none"> 子どもたちはどのような学びができるのか 専門的なこと どの場面で活用できるのか 活用資料集があるのか 学校に求めること 職務内容ややりがい 教科書や内容ごとに違うので、その都度相談にのってもらえるのか 	<ul style="list-style-type: none"> 学校が求める博物館の活動内容や、実施可能な出前授業の方法について 課外授業、教材、体験プログラムなど、どのようにすれば博物館が学校現場で利用しやすくなるか 学校が博物館に求めていること 各種情報の周知方法

図 11 希望する意見交換・質問内容(2018 年度から 2024 年度アンケート(2020 年度を除く)回答及び 2024 年度博物館職員へのアンケート回答より一部抜粋)

博物館では、学校のニーズや、教員により情報が届きやすい広報の仕方についてが主である。それに対して教員は、活用場面や方法、活用することによる効果、活用できる頻度などの情報を得たいようである。また、専門的な情報やキャリア教育に有用な情報について

も関心が高いことがわかる。今回アンケートにおいて両者の意見を吸い上げることができたが、これまでの「博物館の日」のプログラムでは、それらを共有する場とはなっていなかったのである。

4. おわりに

日本博物館協会の博物館総合調査では、博物館と学校連携は行事や授業、職場体験での来館が中心であり、学校と博物館の双方向的な取り組みが必要であると指摘されている。

(11)また、「探究」や「教科等横断」等、学校と博物館の連携において今後博物館が求められる連携場面も変化し多様化すると考えられる。双方向的で教育の潮流を踏まえた連携にするためにも、センターは「博物館の日」を県内博物館と教員の対話の場として組み立てる必要がある。その方法として、「博物館と参加教員との情報・意見交換会」、「学習指導要領を踏まえた連携についての勉強会」、「博物館活用の実践報告会」、「博学連携公開授業」などのプログラムが考えられる。意見交換会や勉強会においては、博物館と学校の連携に携わった経験者をファシリテーターとすることが求められる。また、実践報告会や公開授業等においては、実際に博物館との連携を継続的に行っている教員が行うことが望まれる。

学校は、地域の特徴を活かした運営や探究的な学習を進めるカリキュラム・マネジメントが求められている。地域に根差した博物館は、そのような学校と協働してカリキュラム開発を行うことが期待されている。(12)これまでの「博物館の日」の取り組みにおいて、地域に根差した県内の博物館と連携してきたという実績を活かし、学校と県内の博物館それぞれのニーズを共有し、地域に根差したより具体的な連携方法について検討できる場にシフトしていく必要がある。そうすることで、博物館がもつ学習資源を有効に活用してもらうというもう一つの目的の達成及び、県内の

博物館と学校の継続的な連携に繋がると考える。

註

- (1)小川義和「教員のための博物館の日」の取り組み（『博物館研究』45(11) 2010）
- (2)国立科学博物館ホームページ「教員のための博物館の日」全国の博物館での開催情報を参照

<https://www.kahaku.go.jp/learning/leader/mday/information.php>（最終確認日：2024年11月14日）

- (3)新型コロナウイルス感染症拡大防止のため2020年度は実施を中止し、2021年度は、講演会のみオンラインの形式で実施した。
- (4)学校用移動展示パッケージは、センターが小学校、中学校、高等学校の理科の学習過程の内容に合わせて作成した展示パッケージである。日頃は県内の学校に配置して運用している。詳しくは、センターのホームページを参照

<https://kumamoto-museum.net/kmnc/wp-content/uploads/sites/2/2022/04/shochupackage.pdf>

<https://kumamoto-museum.net/kmnc/wp-content/uploads/sites/2/2022/04/koukoupackage.pdf>(最終確認日:2024年11月14日)

- (5)国立科学博物館『教員のための博物館の日2023 報告書』、『教員のための博物館の日2022 報告書』の開催館の報告による。
- (6)『熊本県内博物館・資料館等団体利用情報』はセンターが毎年県内の博物館に照会を行い、情報を更新した上で「熊本県総合博物館ネットワーク・ポータルサイト」のホームページに掲載している。

<https://kumamoto-museum.net/wp-content/uploads/2024/08/9af4142f360b42a30f90ce9848f40a6b.pdf>(最終確認日:2024年11月14日)

- (7)2021年度から2024年度にかけての参加者

アンケートによる。ただし、2018年度から2019年度のアンケートでは、参加の契機となった媒体について調査をしておらず、2020年度は「博物館の日」を実施していない。

- (8)令和5年(2023年)4月から、研修履歴を活用した対話に基づく受講奨励が義務化されており、教員は受講した研修をPlant全国教員研修プラットフォームに記録する体制が構築されている。

独立行政法人教職員支援機構 Plant 全国教員研修プラットフォーム

<https://www.nits.go.jp/service/plant/>(最終確認日:2024年11月14日)

- (9)『令和6年度(2024年度)熊本県教職員研修計画』によると、研修履歴の記録の範囲は「記録が必須の研修」と「自己申告により任意で記録する研修」に分かれている。令和6年度にセンターが県担当者に行った確認では、「博物館の日」は「自己申告により任意で記録する研修」に該当するため、教員自身で受講履歴登録を行うことになる。

- (10)図7のグラフは、2018年度から2024年度(2020年度を除く)のアンケート回答数を統合したものである。

- (11)公益財団法人日本博物館協会『令和元年度 日本の博物館総合調査報告書』(2020年9月)

- (12)高安礼士「博学連携で博物館に求められること—博物館が取り組むカリキュラム開発を中心に」(『協働する博物館 博学連携の実現に向けて』株式会社ジダイ社 2019)

謝辞

「教員のための博物館の日」に参加いただきアンケートにご協力いただいた教職員の皆様、2024年実施「教員のための博物館の日」においてアンケートにご協力いただいたワークシ

ヨップ参加館ご担当者の皆様に感謝申し上げます。

参考文献

- 小川義和「「教員のための博物館の日」の取り組み」(『博物館研究』45(11) 2010)
- 国立科学博物館『教員のための博物館の日 2023 報告書』
- 国立科学博物館『教員のための博物館の日 2022 報告書』
- 公益財団法人日本博物館協会『令和元年度 日本の博物館総合調査報告書』(2020年9月)
- 高安礼士「博学連携で博物館に求められること—博物館が取り組むカリキュラム開発を中心に」(『協働する博物館 博学連携の実現に向けて』株式会社ジダイ社 2019)